

第3回保健・医療、福祉に関する4ヶ国合同セミナー

神戸大学大学院保健学研究科教授 三木明德

2010年1月18～20日の3日間、ラオスサバナケート県サイフウトン郡の農業研修センターで、アイユーゴー主催の第3回保健・医療、福祉に関する4ヶ国（タイ、ベトナム、ラオス、日本）合同セミナーが開催された。本セミナーは（財）三菱UFJ国際財団の助成のもと、ダラット大学社会福祉学部（ベトナム）と神戸大学大学院保健学研究科が協賛大学として参加した。

1月18日朝9時に農業研修センターに到着すると、区長をはじめ、多数の村民代表の迎えを受け、可憐な少女達が花の首飾りを我々にかけて歓迎してくれた。発表会では、最初に区長が開式の辞を述べた後、午前と午後の部に分かれて、貧困に関わる保健・医療、福祉の現状や解決すべき諸問題が各国の参加者15名から報告された。発表会が終わると、村の長老達によってバーシーという歓迎の儀式が行われた。バナナの葉を織り込み、花をあしらった円錐形の飾りを前にして、長老達は長寿と健康、幸せを祈る呪文を唱えながら、私たちの手首に紐を結んでくれた。

バーシーのあと、センターの広場では村人たちが作ってくれたラオス料理に加え、参加各国から持ち寄った料理がふるまわれ、多くの村民たちも交えて、文化交流会が始まった。カラオケの伴奏が大きなスピーカーから流れ、代わる代わるに歌手手がステージに立った。それに合わせて、美しい衣装をまとった少女達が可憐な民族舞踊を披露してくれた。やがて少女達に誘われて参加者も加わり、踊りの輪は国際交流の場へと大きく膨れ上がった。村人総出の交流会は村を挙げてのお祭りのようでもあった。交流会の後、参加者はいくつかのグループに分かれてホームステイ先に向かった。私がお世話になった家庭でも、家族全員が顔を揃えて歓迎してくれた。このホームステイによって、ラオスの人々の暖かさや親切さ、心の豊かさを知るとともに、生活の様子を実際に体験することができた。

翌19日、ホームステイ先で朝食を頂いたあと、センターに集合してグループ討議が始まった。まず、参加者が国別のグループに分かれて約1時間、前日の報告会で感じたこと、今後の交流のあり方や活動の内容などを検討し、大きなポスターを作成した。そして順に発表して質疑応答を行った。タイ、ラオス、ベトナムからは、アイユーゴーとの連携活動の実際や今後の計画、要望などが発表された。日本からは、保健・医療、福祉などに関する情報の共有や人的交流の重要性が指摘された。また、先進国とされる日本にも社会の高齢化や経済的格差の拡大、雇用、教育、環境問題など様々な問題を抱えており、東南アジア諸国がこれから健全な発展を遂げるためには、このような場でこれまでの日本の歩みを振り返り、その是非を共に検討することが重要であるという意見が出された。グループ討議のあと、参加者が国ごとにセンターの広場に記念の植樹を行った。

メコン川沿いのレストランで昼食をとったあと、区の病院と地区のヘルスセンターを視察した。区の病院といっても、医師1人、薬剤師1人、看護師数名しかいないという。も

もちろん、十分な医療機器はない。また、ヘルスセンターは3名の看護師と2名のボランティアで運営されている。ここでは分娩も行われているというが、壁板の隙間からは青空が覗き、分娩室には粗末なベッドが1つ置かれているだけで、医療機器や医薬品はほとんど見あたらなかった。この見学は我々日本人に大きな衝撃を与えるとともに、今後、これらの国々と連携していくためには、それぞれの国がおかれている保健・医療、福祉の現状を直に知る必要があることを痛感した。午後3時半頃サイフウトンを経って、バスでサバナケートに向かい、6時すぎにホテルに到着した。そして、メコン川に浮かぶ屋形レストランで全員揃って夕食をとった。

20日朝9時から最後のミーティングが始まり、次回以降の行動計画を話し合った。この合同セミナーは、4ヶ国間で情報や意見交換が同時にできること、短期間ではあるが、全員が行動を共にすることによって密な交流ができることなど、非常に素晴らしいプログラムである。今後とも継続して欲しいという要望が出された。勿論、日本人参加者もこのセミナーを通して様々なことを学び、国境を越えて、多くの若い人たちとの交流ができたことは大きな収穫であった。次回はタイのメーホンソンで開催し、テーマは環境問題にすることが決まった。なお、時期については今後詳細を詰めることとした。

ミーティングのあと最後のランチを参加者全員で食べた。ここで、ベトナムグループとはいよいよお別れである。ちょっと目をうるうるさせながら抱き合う人、固く手を握って再会を約束する人、後ろ髪を引かれながらバスに乗り込む人。バスが動き出すと、窓から身を乗り出して両手を振り続ける姿がやがて街角に消えていった。

テレビや新聞などでインドシナ諸国の状況を知ることができる。しかし、それはある一面でしかなく、しかも、磨りガラスを通して映し出された映像である。今回、日本から参加した若い人たちは、初めてラオスの人々と直に接し、確かに貧しいのは事実であるが、素晴らしい文化と伝統を持ち、日本人が忘れてしまった心の温もりや豊かさを感じたようである。そして、これまで想像すらできなかった世界を、自分の目を通して直に知ることができたこと、そして何よりも、言葉の壁は少しあったにせよ、色々な国の若者たちと本当の仲間になれたことが、最大の喜びであったようである。

アイユーゴーの名は、「共に」という意味のギリシャ語からとったものであるが、セミナー最後のスピーチで、「アイユーゴーはI and you go togetherだ。」と駄洒落を飛ばすと、会場から大きな喝采を頂いた。私は今年還暦を迎えたが、あとしばらく、せめて足腰の立つ間はアジアの人々との交流を楽しもう。そういう思いを新たにしたいセミナーであった。



セミナーに参加した若い人たち（一人を除く）



セミナー発表会の風景



村民との文化交流会



センターの広場に植樹する日本からの参加者



サイフウトン地区のヘルスセンター